

主唱/法務省



第75回 “社会を明るくする運動”

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

作文コンテスト 資料集



ぴーなつつ
サラちゃん
もいるよ!

全国推しホゴちゃん in 霞が関2025

千葉県代表 **グランプリ受賞**👑

ぴーなつつホゴちゃん

“社会を明るくする運動” 中央推進委員会
更生保護法人 立川更生保護財団

第75回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト

令和7年12月26日 法務省

法務大臣賞・特別賞表彰式



▲受賞者・参列者の集合写真



▲平口法務大臣から受賞者へ授与
(左：足立さん、右：藤田さん)



特別賞は、丸善雄松堂株式会社及び株式会社丸善ジュンク堂書店の両社長から受賞校へ授与していただきました！



▲特別賞関係者の集合写真

はしがき

法務省が主唱する“社会を明るくする運動”は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築くための全国的な活動です。

この作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う全国の小・中学生の皆さんに、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪・非行のない地域社会づくりなどについて考えたことや感じたことを作文にすることを通じ、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。第43回（平成5年）運動から始まり、今回で33回目となりました。

令和7年の作文コンテストには、全国から約30万点に及ぶ応募がありました。応募作品については、中央推進委員会で審査し、法務大臣賞をはじめとして、小学生の部16点、中学生の部16点の入賞作品が決定しました。

また、今回から丸善雄松堂株式会社及び株式会社丸善ジュンク堂書店の御協力により、特に積極的な取組を行う学校を表彰する「特別賞（丸善まなびのつながり賞）」を新設いたしました。受賞された2校におかれては、学校教育の中に本作文コンテストを取り入れ、他校の模範となる取組をしていただきました。本資料集は、法務大臣賞を受賞した作品及び特別賞受賞校の取組を紹介したもので、更生保護法人立川更生保護財団の御協力により制作されました。1人でも多くの方に作文を読んでいただき、児童・生徒の皆さんの思いを犯罪や非行のない地域社会づくりに役立てていただくとともに、これから本作文コンテストに参加される児童・生徒の皆さん、学校関係者の皆さんの参考になるよう願っております。

終わりに、この作文コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国小学校国語教育研究会、全日本中学校国語教育研究協議会、公益社団法人日本PTA全国協議会、更生保護法人立川更生保護財団、丸善雄松堂株式会社、株式会社丸善ジュンク堂書店をはじめ、多大な御尽力をいただいた全国の教育委員会や学校関係者の皆様に対し、深く感謝を申し上げます。

令和8年3月

法務省

“社会を明るくする運動”中央推進委員会

入賞作品一覧

最優秀賞（小学生・中学生）

法務大臣賞

いちょうの木がくれたつながり
立ち直りに寄り添うとは

島根県
愛媛県

足立 崇人
藤田 一花

優秀賞

全国連合小学校長会会長賞

小さな優しさが広げる明るい社会
「待ってるからね」「おかえり」の力
「言葉の重みと社会の光」

岐阜県
鹿児島県
沖縄県

新田 桂士
須ヶ牟田 怜奈
下地 真誠

全日本中学校長会会長賞

一人じゃないと感じられる社会へ
地域の力で街を灯す
支えになることをあきらめたくない

北海道
新潟県
三重県

藤元 星愛
山本 奏子
林 海翔

全国保護司連盟理事長賞（小学生の部）

社会はみんなとつながっている
言葉の力
ぼくとじいじはサポーター

岩手県
埼玉県
和歌山県

双木 百香
関口 心春
松林 薫

全国保護司連盟理事長賞（中学生の部）

更生保護は甘さか、それとも希望か
何度でも立ち上がることができる世界を
与えるチャンス

北海道
岩手県
宮城県

長岡 唯之介
高橋 咲稀
佐々木 蒼來

日本更生保護女性連盟理事長賞（小学生の部）

守りたい命
言葉の力
社会がつながるためのやさしさと勇氣

栃木県
富山県
岐阜県

伊藤 寛太
山本 麻央
稲石 愛佳

日本更生保護女性連盟理事長賞（中学生の部）

「特別」ということ

北海道

甚伊 光彩

立ち直り、その未来のために
立ち直りを支える社会へ

広島県
熊本県

藤間志帆
岡村詩

日本BBS連盟会長賞（小学生の部）

優しさのバトン
信じるのが社会を明るくする
広がる支えあいの輪

秋田県
山梨県
長崎県

増田大和
石原茉奈
永川千陽

日本BBS連盟会長賞（中学生の部）

見えない気持ちに目を向けて
小さな行動が未来を変える
可能性の扉を開くたった一つの「機会」

栃木県
東京都
京都府

高田玲奈
堤琉心
津田新大

日本更生保護協会理事長賞（小学生の部）

10円ガムとこれからのぼく
「居場所」をつくる
大きな家族のような社会に

兵庫県
島根県
大分県

鎌田葵生
持田幸哉
後藤愛心

日本更生保護協会理事長賞（中学生の部）

空気を読むより行動を選んだ日
繋がっている社会
保護司とつくる、希望のある時間

茨城県
和歌山
福岡県

本橋幸芽
清水莉緒
中井智喜

優秀賞受賞作品は
こちらからご覧いただけます



審査員

（役職名は審査当日のもの）

作文審査員

全国小学校国語教育研究会会長

長沼正城

全日本中学校国語教育研究協議会会長

中嶋富美代

更生保護法人全国保護司連盟理事長

谷垣禎一

一般社団法人日本更生保護女性連盟理事長

千葉景子

特定非営利活動法人日本BBS連盟会長

片岡敏晃

更生保護法人日本更生保護協会理事長

十倉雅和

法務省保護局長

吉川崇

特別賞審査員

丸善雄松堂株式会社代表取締役社長

矢野正也

株式会社丸善ジュンク堂書店代表取締役社長

西川仁

🌳 いちょうの木がくれたつながり 🌳

島根県・安来市立社日小学校 六年 足立 崇人

「とっても楽しいよ！」この声を聞いて、僕はとても嬉しい気持ちになりました。

僕が住んでいるのは小さな町。家の近くには神社があって、その真ん中には大きな大きないちょうの木があります。その木を囲むようにして毎年夏休みにはラジオ体操をしています。去年までは町内の小学生だけで集まって、ただただ体を動かすだけでしたが、今年の夏、六年生で班長になった僕は、新しい企画を考えました。それは、子どもだけではなく地域のおじいさんおばあさんを誘って一緒にやることです。

きっかけは、小学校の課外活動で地域のおじいさんやおばあさんからいろいろなことを教わったことでした。今回、「もっと地域の人たちと仲良くなれる活動を自分たちでもできないだろうか」と考えました。そこで、夏休みのラジオ体操に新しい工夫を取り入れてみることにしました。ラジオ体操をした後に集まってくれたおじいさんおばあさんたちと一緒にふれあい活動をするのです。ふれあい活動の内容は、「今日は何の日？」コーナーを作り、子どもたちから説明すること。そしてもうひとつ、子どもたちとおじいさんおばあさんで簡単なレクリエーション活動をするのでした。

ラジオ体操はもともと体を動かして健康を保つことを目的に始まった活動ですが、実際にやってみると、それ以上の効果があったように感じました。僕たちが毎日「今日は何の日」を発表すると、笑ってくれたり、なるほどと感心してくれたり、そこから会話がどんどん広がっていきました。「今日はどんな一日にしようかな。」とみんなが前向きな気持ちになれたような気がします。

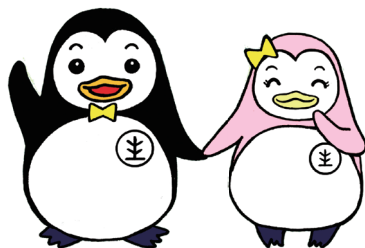
また、ふれあい活動を続けていくうちに、お年寄りと子どもがお互いの顔や名前を覚えるようになり、自然と会話も増えました。体操の後に「あだち君今日も元気でええね！」「誘ってくれてありがとうね！」と声をかけてもらえるようになりました。参加してくれたお年寄りの口コミで少しずつ参加者も増えて、「毎日楽しみにしちよーけんね。」

と感謝の言葉をかけてもらおうと、僕たちもやりがいを感じました。

ラジオ体操期間が終わったある日、参加してくれていたおばあさんに道ですれ違い、「お元気ですか？」と声をかけました。するとそのおばあさんは笑顔で「まあ、ありがとうね。毎日がとっても楽しいよ。」と答えてくれました。その言葉を聞いて僕は、自分たちの活動が少しずつ地域の皆さんを元気に、明るくし始めているのだと気づき、とても嬉しくなりました。

この活動を続けるうちに、僕は「社会を明るくする運動」とはどういうことか考えるようになりました。テレビや新聞では、毎日のように悲しい事件や犯罪のニュースを目にします。そのたびに、犯人はどうしてもっと周りの人に相談をしたり、助けを求めたりできなかったのだろう、と思いました。心が満たされず、こ独を感じることで事件につながってしまうのではないかと考えました。今回の企画を通して、大人も子どもも顔を合わせて声をかけ合い、心を通わせることで気持ちが明るくなり、満たされていくのを感じました。そうして心が元気になると、学校でも仕事でも前向きに頑張れるようになり、社会全体が明るくなっていくのではないかと思います。地域のつながりが強くなることは、犯罪を減らす大きな力にもなるはずです。

僕は来年中学生になりますが、この活動を四年生、五年生に引き継ぎ、自分も参加し続けたいと思います。そして、周りの人の心を少しでも動かし、社会を明るくできるような人間になりたいです。そしていつか、地域の人みんなが「毎日がとっても楽しいよ」と笑顔で言い合えるような社会をつくるのが、僕の目標です。



🌀 立ち直りに寄り添うとは 🌀

愛媛県・西条市立東予東中学校 三年 藤田 一花

私の父が勤めている職場には、年齢や出身、国籍も違う様々な人たちが在籍しています。その中には前科がある人も少なくはないそうです。

三年ほど前、刑務所に服役していたAさんという方が父の職場で働き始めました。作業に慣れるまで時間は掛かったけれど、仕事はとても丁寧で、毎日誰よりも早く出社し、一番遅く帰る生活を続けていたそうです。職場のみんなは真面目で優しいAさんを慕っていました。その頃のAさんに、私も一度会ったことがあります。柔らかな物腰から、温かい人だと感じました。

ようやく仕事にも慣れてきた頃、Aさんは突然仕事を辞め、誰も連絡が取れなくなってしまいました。後から分かったことですが、Aさんが辞職した理由は、同じアパートの住人たちから退去の催促をされ、それに嫌気がさしたからだったそうです。職場のみんながAさんの辞職に戸惑いました。理由を知った私もその話を聞いたとき、やるせない気持ちになったことを今でも鮮明に覚えています。

Aさんの辞職からかなりの時間が経ち、父は再びAさんと連絡が取れるようになりました。今回、私が社会を明るくする運動の作文でAさんのことを書きたいと父に相談すると、父はAさんとの食事に連れて行ってくれました。久しぶりに会ったAさんは以前と変わらず優しく、「作文に書いてくれて嬉しい」と、辞職した当時のことをたくさん話してくれました。

アパートでは、周りからいつも白い目で見られていた。近くを通れば避けられ、聞こえる距離で心無いことを言われた。でもそれは当たり前であって、自分がここに住んで申し訳ないと思っていた。そんな中で職に就けることになった。やっと就けた仕事だから頑張りたい。でも人との付き合い方が分からない。不安を抱えながら仕事を続けていたが、職場の人は優しくった。ここで働けて良かった、仕事が楽しいと思えるようになったが、自分が楽しんでいいのかという思いが常にあった。職場の人たちは温かく接してくれるが、アパートの住人たちは自分をよく思っていない。だから、毎日一番遅くに職場を出て、歩いて時間を潰し、

深夜にアパートに帰る。朝早くにアパートを出て、誰よりも早く出社する。とにかくアパートにはいたくなかった。そんな日々の中で、ある日、父と一緒に私と会うことになった。近所の子どもたちからかわれたり、保護者の目や態度が気になったりして、自分からは関わってこなかった。だから、私と初めて会うときは怖かった。でも、そんな風に思うのは相手に失礼だ。相手のことを勝手に決めつけるのは、あのアパートの住人と同じだ。そう思って、私と会うことにしたそうだ。

Aさんのこれまでのことを聞いて、私は気持ちを言葉にすることができませんでした。私は父の仕事の辛さを知っています。怪我也多く、体力も精神力も必要な仕事です。毎日誰もいない職場に行き、疲れた体で暗闇を歩くAさんは、どんな気持ちでいたのだろうと、アパートの人たちへの怒りも湧きました。しかし、Aさんの最後の言葉を聞いて、私自身もはっとさせられました。それは、会って話をするまでは私もAさんを「怖い」と思い、服役していたことがあるという良くないイメージで見えていたからです。

私たちは、自分の想像や思い込みで人を判断してしまいがちです。その人のことを知ろうともせず、先入観を持って他者と接することは、いつしか差別や偏見につながります。大切なことは、相手の経歴や過去にとらわれず、今自分の目の前にいる人と向き合おうとすることだと思えます。私はAさんと実際に話をしてAさんの優しさを知りました。アパートの人たちも、もっと話をしていればまた違う結末があったかもしれません。

人は何度でもやり直せる。けれど、立ち上がるためには場所と周りの手助けが必要です。Aさんは、

「逃げる場所を間違えず、周りの人、自分を大切にしてくれる人を大切に。」

と教えてくれました。私はこれから、誰に対しても進んで話をしようとする、しっかりと言葉にすること、そして言葉を大切にすることを心掛け、周りの人たちに寄り添っていきたいと思います。

父とAさんは、今もたまに食事に行き、他愛もない話をするそうです。誰もが互いに、友人として笑いあったり、楽しく食事ができたりするような、そんな明るい社会になることを願い、私も目の前にいる人と向き合って、大切にしていきたいと思っています。

特別賞（丸善まなびのつながり賞）

学校教育 × “社会を明るくする運動” 作文コンテスト

○小学校の部 熊谷市立熊谷西小学校（埼玉県）

校長先生が“社会を明るくする運動”について講話を行い、それを踏まえて生徒が授業内に作文を書き上げ、優秀作品を校内掲示するなど、生徒の意欲を喚起し、更生保護について深く考える機会を提供していただいています。



●本コンテストに取り組んだきっかけは？

「学校は社会の縮図である」と言われますが、学校という社会の中で子供たちがお互いに助け合い、それぞれの良さを認め合う気持ちを醸成することが、実際に子どもたちが社会に出たときに大いに役立つ力であると考えます。そこで、本コンテストに全校で取り組み、学級内での意見交換を通して、互いの考えや思いを共有する時間を設けることで、互いを認め合い、力を合わせて高め合う良い機会になると考えました。（長谷部校長先生）

○中学校の部 越前町立織田中学校（福井県）

25年にわたり、本コンテストに参加いただいています。また、保護司とともに効果的な地域活動を継続されており、生徒にとって保護司が身近な存在になることで、更生保護への関心を育んでいただいています。



～受賞報告を聞いた生徒たちの声～

- ・特別賞を受賞して、織田中学校を誇らしく思いました。誰かが悩んだり、困っていたりしたら、そっと手をさしのべられるような行動をとって、誰かの支えになりたいです。
- ・この作文を書いたとき、課題を難しく考えていました。でも、入賞作品の朗読を聞いたとき、身近なことから変えられることを知りました。ですから、まずは自分からできることから始めていこうと思います。

●取り組んで良かったことは？

生徒は作文を書くことを通して、自分の言動を見直し「安全で安心な明るい社会を築く」ために、何が大切か、自分はどうのような行動をとると良いかなど自分のこととして向き合っています。また、学級担任は入賞作品を生徒に読み聞かせ、自分たちにできることについて学級全体で話し合う時間を設けています。お互いに意見を交流する中で、新しい気づきや様々な視点に触れ、学びがより深まっています。（鳥居校長先生）

更生保護法人 立川更生保護財団について

立川更生保護財団は、立川ブラインド工業株式会社の創業者である立川孟美氏が、犯罪や非行をした人達の改善更生を図るために地道に更生保護活動に取り組む民間ボランティアの方々の方に深く感銘を受け、昭和63年10月に設立した法人であり、以来、更生保護事業の推進に助力してきました。

財団では、犯罪や非行のない明るい社会の実現のため、次のような事業を行っています。

一 “社会を明るくする運動”～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～への協力

本運動では犯罪や非行のない地域社会の実現のため、全国各地で様々な取組が行われています。財団としても、本作文コンテスト作文集の制作をはじめ、様々な取組に協力をしています。

二 更生保護ボランティアの活動への協力

更生保護の活動には、地域に暮らすたくさんの方がボランティアとして関わっています。犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える保護司、更生保護女性会、BBS会といった民間の更生保護ボランティアが行う活動に対し、助成を実施しています。

今後も、犯罪や非行をした人の立ち直りを支援している方々への協力・応援を通じて、犯罪のない明るい社会の実現に向けて、積極的に事業を展開していきます。

